

日本におけるマーチングの未来像

— 日本の新しい文化として —

The future of Marching in Japan.

— As a new Japanese culture —

IPUマーチングバンド部

大西 雅博

ONISHI, Masahiro

IPU Marching Band

次世代教育学部教育経営学科

中家 淳悟

NAKAIE, Jungo

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：マーチング, DCI, マーチングコンテスト, ドラムコー, ステージマーチング

Half century has been almost passed since a marching which is a new musical expression was introduced to Japan from United states. Initially a signal bugle was used same as United States and still had lots of affection from military band, however, it is getting recognized as purely entertainer show require highly skilled musical techniques. A concept of Japanese marching is shifting from “Play with moving” towards “Move with playing” Here I would like to consider and suggest a future vision of Japanese marching, not only as a copy of American marching, but also one of Japanese new music culture and as an educational opportunity towards younger generations.

Keywords：Marching, DCI, Marching Contest, Drum Corps, Stage Marching.

はじめに

新しい音楽表現の分野であるマーチングが、アメリカから日本に伝えられて半世紀が経過しようとしている。当初は、アメリカ同様信号ラッパを使用し、軍楽隊色を残しながらのスタートであったが、近年Showとしてのマーチングが栄え、音楽的にも高度なテクニックが要求されるようになってきた。「動きながら演奏する」マーチングから「演奏しながら動く」マーチングへとニュアンスが変わりつつある。そんな昨今、アメリカの模倣ではなく、日本の新しい音楽文化のひとつとして、また青少年育成の教育の場として、今後の日本におけるマーチングのあり方を考察し提言したい。

1. 日本におけるマーチングのルーツ

1960年頃より、アメリカ軍楽隊の影響を受け、日本においても自衛隊、警察音楽隊等がパレードやドリル演奏を始めた。この動きを受けて、徐々に高等学校の

吹奏楽部をはじめ、一般のバンドにも広がりを見せ始めた。

そして1970年日本万国博覧会において、アメリカからカリフォルニア大学等のマーチングバンドがショーを披露したことも影響し、日本の吹奏楽バンドも本格的にマーチングに取り組み始めた。

現在日本では30m四方の枠の中に5m間隔でポイントをマークし、その中でマーチングすることが多い。それは、この日本万博の練習場所であった駐車場の白線が5m間隔であったためであり、それ以来日本のマーチングは5mを基準としている。

ちなみに本場アメリカでは、フットボールのスタジアムを使用する関係で、5ヤードを基準としているが、理由はそれだけではなく、美しい姿勢で演奏するのに適しているとも言われている。アメリカ人より平均的に身長が低い日本人が、長い単位を基準としているのは、やはり疑問が残る。当初、便宜上駐車場の白線を利用して練習を始めたのは止むを得ないとしても、その後日本人に合った改善がなされていないことは、後々のマーチングの発展にも影響を与えたのでは

ないか。

アメリカのマーチングのルーツは、軍隊の信号ラッパ、または太鼓にあり、戦争の合図として欠かせないものであった。突撃ラッパと呼ばれる合図は、日本でも有名なフレーズのひとつである。当然、最初は音楽を奏でるものではなかったため、ラッパ（ビューグル）にはピストンも無く、Gの倍音しか出せなかった。その後、アメリカンフットボールのハーフタイムショーで行われている、カレッジスタイルマーチングとの融合により、より幅広いサウンドが要求されるようになってきた。

そして、ビューグルにピストンが1個装着された。

また、高い音から低い音までカバーするため、ビューグルのサイズもソプラノからコントラバスまで、大きさ（管の長さ）の違うものが登場してきた。それでも、まだ全ての音はカバー出来ず、ピストンが2本になり、その後現在の3本に進化を遂げた。日本万博の1970年頃には、まだピストンのないものが日本に輸入されていた。

吹奏楽で使用する管楽器は、B、C、Es、A等々キーの異なる木管楽器と金管楽器に分類されるが、ビューグルは全て金管楽器で構成され、ソプラノ、アルト、バリトン、コントラバスと、どの楽器もGを基音に1オクターヴずつ低く設計されている。アメリカ人らしい効率的な発想の作り方である。このビューグルと鼓隊を一体化させたものを、ビューグルコーと呼び、吹奏楽の盛んな昨今も根強いファンが多く存在する。前述したように、元来信号ラッパであったため、遠くまで聞こえるようGの音を基音としており、大変明るい響きが特徴である。そのサウンドが日本人にも好まれ広がりを見せたが、その後学校現場を中心に吹奏楽が栄えていった経緯もあり、現在では吹奏楽の形態でマーチングに取り組むバンドが多い。

太鼓は、軍隊において騎乗で叩いていたため、楽器を馬の背中に水平に置くことが出来ず、肩から吊るしたものを体の左側にセットした。そこで、左手のパチ（スティック）だけ掌を上にして持つ、トラディショナルグリップが誕生した。太鼓も、ビューグル同様に進化しており、小太鼓（スネアドラム）からテナードラム、ベースドラムへと、音の幅が広がっている。テナードラムは、最初一人1台ずつ持っていたが、2個連結したものが作られ、次にトリオ、クオード、クイント、セクステッドと現在は6個の太鼓を一人で演奏することも可能である。ベースドラムも一台に留まらず、複数のプレイヤーで分担し、ベース音独特の、奥

行きのあるサウンド作りに貢献している。現在では、14インチから、36インチまで11台のベースドラムを演奏することが可能である。

当初はパーカッションピットが存在しなかったため、サウンドを追求する過程でティンパニを一人一台ずつ持ち動いていた時期もあった。現在ではバンドフロントにセットされるようになり、それとともに、マリンバ、シロフォン、ヴィブラフォン、グロッケン等のキーボードも加わり、金管楽器のみのビューグルコーには困難なフレーズを担当するとともに、音楽に華を添えている。また、吹奏楽やオーケストラで使用する楽器もフロントピットに設置し、音楽の効果を高めている。現在では、ビューグルコーのみならず、吹奏楽編成のバンドもパーカッションピットを設置して演奏することが多い。

カラーガードは当初、軍隊のフラッグ、ライフル、セイバー等を手具として使用していたが、ショーのクオリティを高めるためにチアリーディングのパフォーマンスも取り入れるようになっていった。ビジュアルの効果を上げるため、手具も既成概念にとらわれず、毎年のように新しい形のものが登場し、使用方法の工夫、技術の発展が目覚ましい。また、手具を持たないパフォーマンスも多く、ダンス、バレエ等を基本とするムーブメントにも力を注いでいる。

こういったアメリカのマーチングスタイルが確立されていった場所が、DCI（ドラム、コー、インターナショナル）である。

DCIは当初、アメリカの青少年非行防止を目的として、寄付金により立ち上げられた組織である。

当時アメリカは、校内暴力、麻薬、暴行など荒れた若者たちの生活が社会問題になっていた。そこで、自国の未来を心配した企業家をはじめ、多くの人々の支援を受けて、13歳から22歳までの青少年を対象に、社会教育としてのマーチング活動を始めた。この活動が成功した背景には、学校教育でのマーチングバンドの存在も大きい。現在、ハイスクールの90パーセント以上にマーチングバンドが存在する。

近年DCIは、インディアナ州にマーチングドーム Lucas Oil Stadiumを建築。以前はファイナルイベントも、各都市のアメリカンフットボールスタジアムを借用しての開催であったが、毎年ホームグラウンドで開催されることとなった。

DCIでは毎年約4,000チーム（約40万人）がエントリーしており、17の北アメリカ都市で35以上のワールド選手権大会、100以上のイベントが開催される。こ

の様子は、テレビ放映され数百万人のファンが存在する。メンバーになるためのオーディションは、ファイナルイベントまで残るトップチームの3,500席を狙って8,000人ほどがチャレンジするが、その中でもトップコーはさらに倍率が高い難関となっている。数年前までは、このオーディションに日本人が合格することには大変困難とされてきたが、近年日本における演奏技術の目覚ましい発展により、トップコーでも多くの日本人たちが活躍している。

メンバーになると約3ヶ月のツアーに参加し、アメリカ全土で繰り広げられる約40回前後の大会を勝ち抜いていく。そのほとんどをバスで移動し、主に学校の体育館を寝床に練習を重ねていく。長距離移動の場合、2日間大草原の中をバスが走ることもある。食事は一日一食というチームもあり、ホットドッグ1個のみ、時にはそのホットドッグが、リンゴ1個に替わることもある。本来ツアーには、キッチントラックが同行するが、経済状況の苦しいチームに至っては、途中で食事が無くなってしまうこともある。

このように過酷な体験をしても、また翌年メンバーとしてエントリーする者が多い。DCIから帰国した教え子は、「体力の限界を感じ、夜寝袋に入ってから涙が止まらなかったが、朝になってみんなの顔を見ると頑張れた。ファイナルの感動は、今までに味わったことのないもので、身体の震えが止まらなかった」と話した。この年、彼の在籍していたチームは世界チャンピオンに輝いた。

日本人は18歳からDCIにエントリーすることが多いが、こうして4年間参加すると、日本では大学卒業の年齢となる。帰国した者の多くは、マーチングに魅了され、もっと日本に広めたいという夢を描いてインストラクターになろうとする。そして、母校のマーチングインストラクターをしながらアルバイト生活をつづけることとなる。アメリカの参加者と大きく異なるのは、そのほとんどが現役の大学生であるという点である。大学の夏休みを利用してのDCI参戦と、大学進学を諦めての渡米とは、大きくその将来が変わることは言うまでもない。

現在IPU環太平洋大学において、在学中一回（半年間）DCIのツアーに参加しても休学・留年をしない制度を実施しているのは、夢と現実の両立を図ってほしいという願いからである。

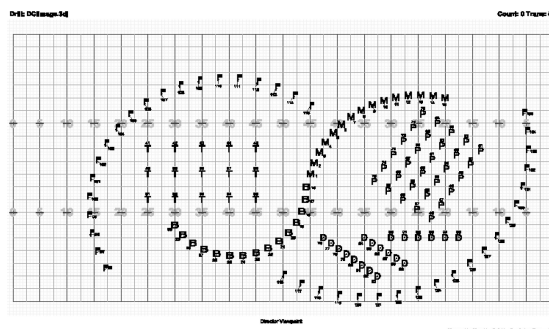
こうして、アメリカにおけるマーチングのルーツや現状をみると、日本のそれとはかなり異なることが容易に理解できる。

マーチングのみならず日本の社会は、良きにつけ悪しきにつけアメリカの模倣から始まった文化や産業が多くを占める。しかしその後発展を遂げたものの多くは、日本独自のシステムを構築している。日本人の器用さ、繊細さを生かしたからこそ発展した文化や芸術、産業は数多く存在しているのではないか。そこで日本のマーチングのさらなる発展を実現させるために、未来への方向性について考察を深めてみたい。

【マーチングコンテ（ドリルシート） 1】

メンバーが自分のポジションを把握するためのフォーメーションシート。本来は各自の番号と、動き方のインストラクションが記載されている。

下記のドリルシートは、アメリカのフィールドをイメージしたものである。



縦50ヤード、横100ヤードのフィールドに構成人数は135名。

2. 日本におけるマーチングの現状と課題

【音が荒れるという伝説】

冒頭で述べたように、1970年以来日本では5mを八歩で歩くことを基準としてきた。しかしこの歩幅は、小中学生にはやや広く姿勢を崩す原因となることも考えられる。

中学1年生女子の平均身長151.9cm、平均座高82.1cm（2011年文部科学省学校保健統計調査より）ということは、足の長さの平均は69.8cmということになる。5m八歩、つまり一歩62.5cmで歩く姿を真横から見ると、足と床の描く三角形がほぼ正三角形になることを想像して頂けるだろうか？アメリカ人が5ヤードを八歩で歩くその三角形は、おそらく底辺が二分の一ほどの二等辺三角形になるであろう。これが逆に日本の小学生になると、底辺の方が長い三角形になる。この歩幅で歩くことを原則とした場合、演奏が困

難であることは一目瞭然である。

そして、この歩幅が「マーチングをやると音が荒れる」という伝説ならぬ、事実を生み出した原因のひとつであろう。当時、足を前に出そうとするあまり多くのバンドが上体を反り返らせて歩いていたが、この姿勢では身体に余分な力が入り、美しい音色は期待できない。「マーチングをやると音が荒れる」という評価となったのも当然のことである。

現在では音への悪影響が最小限に抑えられる歩き方の研究が進んでおり、伝説を語る吹奏楽指導者も随分少なくなってきたが、やはり5m八歩は厳しい歩幅であることに変わりはない。

【アメリカのスタジアムvs日本の体育館】

DCIに代表されるアメリカのマーチング大会は、ほとんどがアメリカンフットボールのスタジアム（屋外）で開催される。それに対し、日本は大型の体育館（屋内）で行われることが多く、その器の大きさの違いは歴然としている。

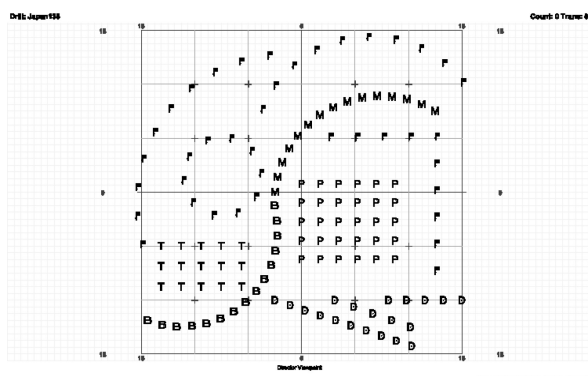
前述したLucas Oil Stadiumのキャパシティは、60,000人であるのに対し、全日本吹奏楽連盟主催のマーチングコンテスト全国大会が開催される大阪城ホールは9,000人である。日本マーチングバンド・バトントワリング協会主催の全国大会が開催されるさいたまスーパーアリーナでも、20,000人弱の収容である。

またアメリカのフィールドは、100ヤード×50ヤードに対し、日本は30m×30mをエリアとしている。メンバーの人数は、トップチームにおいてアメリカ・日本ともに130人～150人で構成される。管楽器・打楽器・カラーガードの人数もほぼ同様に構成される。また、打楽器も屋外用に設計された大音量・ハイピッチのものを使用し、持ち方・叩き方においてもアメリカの奏法が多く取り入れられている。

これほど「器」の条件が異なるにも関わらず、日本のバンドが奏でる「音」はアメリカの音量とほぼ同じである。こうして会場のサイズを考慮せずに作ったサウンドが故に、マーチングは音楽的でない、音が雑である等々の評価になった時期もあったのではなかろうか。

【マーチングコンテ（ドリルシート） 2】

下記のドリルシートは、日本のフロアーをイメージしたものである。



30m四方の正方形のエリアに構成人数は135名。前記のアメリカのフィールドと比較すると、かなり窮屈なエリアで動いていることが理解できる。四分の一以下のスペースに同じ人数が入ることになる。

【マーチングドラムの音楽的効果】

マーチングパーカッションの演奏技術も然ることながら、各楽器メーカーの製作技術の進歩が目覚ましい。当初は、ドラムヘッドのテンションにシェルやリムが耐え切れず、練習中に太鼓まるごと崩壊してしまうというような失敗を重ねながら、現在の軽くて丈夫なハイテンションスネアドラムの誕生に至っている。アメリカのように屋外の広いエリアでマーチングする場合、このように周波数の高い音は、より遠くへより早く伝わるため、観客にもプレイヤーにも効果が高い。しかし一台では倍音が少なく響きが浅くなってしまうため、大勢の奏者で同時に叩くことによりサウンドを安定させている。もちろんそこには、細かなビジュアルを揃えて「観せる」という効果も加わり、Drum Showの華やかな演出に役立っている。

スタジアムの芝生に音を吸い込まれても、尚且つ観客席まで迫力が伝わるというこのドラムラインを、フロアーがコンクリートの屋内でそのまま演奏すると大音量になることは容易に想像できる。しかも前述したように、奏法も練習方法もほとんどアメリカ人が作成したものを採用している現状がある。どちらが先かは定かではないが、当然この音量に負けないだけの管楽器のボリュームが必要になってくるはずである。

またそれとは逆に少人数のバンドにおいて、スネアドラムが一人しかいないにもかかわらず、大編成のバンドと同じテンションの楽器を使用しているケースも

多々見受けられる。また100人超のバンドと同じ奏法で同じボリュームで演奏すると、当然一台のハイテンションスネアがバンドのサウンドに馴染みにくく浮いた状態になる。しかし、それが現在のマーチングスタイルであり、そうしなければならないという認識が、バンドの音楽作りより先行してしまい、残念な結果となるケースも多い。アメリカから伝わったマーチングのマニュアルは、そのほとんどが大編成のバンドを想定しているにも関わらず、このように日本においてもそのまま採用している小編成のバンドも少なくない。

今年度の吹奏楽連盟主催マーチングコンテスト某県大会において、吹奏楽のオリジナル曲でパレードしている25人のバンドに対し、スネアドラムのチューニングが低いと指摘した上に、マーチングスネアはハイテンションでなければなりません、と講評した審査員がいた。奏でる音楽に対し、どのようなピッチのスネアドラムがマッチするのか、そしてより良い音楽とは何かを考える前に、アメリカのマニュアルを優先してしまう指導者も多く見受けられる。

【マーチングコンテストの在り方】

日本においても数多くのマーチング大会が開催されている。全日本吹奏楽連盟マーチングコンテスト、日本マーチングバンド・バトントワリング協会マーチングフェスティバル、DCJ、ジャパンカップ、マーチング国際大会、ステージマーチングコンテスト、マーチングin岡山、沖縄スーパーマーチング等々、支部・県独自のものも含めるとかなりの数になる。

それぞれのルールで行われており、どの大会も個性があって大変楽しめる。大編成・中編成・小編成部門に分かれて審査される大会もあれば、10人も160人も同じ土俵で審査される大会もある。管楽器は金管楽器しか使用してはいけない大会、ビューグル（信号ラッパの進化形）しか使用しない大会もある。どんどん新しいスタイルが生まれているマーチングの世界で、良き伝統を守り続けようとする方々の努力には頭が下がる思いである。

こうして日本においても、数々の大会やイベントが盛んに行われているが、大会に関しては審査の基準が明確でないものも見受けられる。ある大きな大会において、支部大会ではマーチング指導者を中心とする審査員構成であるが、全国大会審査ではマーチングの専門家は一人も存在せず、作曲家・演奏家で構成されるという、やや不思議なものもある。マーチングも音楽が大切なのだと言われれば当然の話であるが、では

マーチングの専門家には音楽を聴く力はないのか？ということにもなりかねない。マーチングの大会である以上、出場者の立場としては総合的な審査を期待しているのではなかろうか。

またある大会では、人数による編成の区別がないため、大きなホール全体を良いサウンドで響かせることに限っては、やはり大人数が有利ということになる。ボクシングでいうと、ヘビー級とライト級が闘うようなものであるが、日本の大会なので、相撲的な発想なのであろうか？経験値が一定でない大人であればそれも可なのかもしれないが、中学生の36人バンドと120人バンドでは、明らかにサウンドの差となって表れる。もちろん絶対に勝負にならないということではないが、大会に出場する場合、大人数のバンドも含めた相対評価となるため、ムーブメントが大きく評価されないのであれば、36人で120人に対抗できるサウンドを作らなければならない。そこで、少人数のバンドは無理をしてしまうケースが大変多くなり、「1人で3人分吹きなさい」という、あてはならない指導に陥ってしまうのである。そして伝説通り「音が荒れる」マーチングバンドへと成長？していく。個人の音楽性を高めることなく、バンドのレベルアップなど図れるはずがないと理解しているが、残念ながら小編成バンドの落とし穴へと導かれてしまうのである。

コンクールの勝敗が優先される指導は、マーチングに限られたことではないが、コンクールに向けての音楽作りと個人の音楽性の向上とは必ずしも一致しない。バンドが「勝つための音楽」と個人が目指すべき「芸術的な音楽」は同一ではないこともある。この原因は、各バンドのコンクールへの取り組み方、または主催者の運営・規定の在り方の双方にあると考えられる。

余談であるが、日本の高校生がマーチングの世界大会に出場すると、多くの場合優勝、または上位にランクインされる。なぜなら諸外国は、青少年の段階においては無理をして高度な技術を身に付けさせず、基本的な技術の習得に徹底しているからである。それ故に、ハイスクール卒業後の音楽的成長には目を見張るものがある。そしてその証明が、15カ国からエントリーしているDCIの超越した演奏技術とパフォーマンスなのである。

【最後に】

近年は、テレビの影響もあり『マーチング』という言葉がようやく世間一般的に理解されつつある。しか

しながら、文化的背景を考えるとアメリカのような発展の仕方は困難であろう。ではどのような形で後進にバトンを渡していけばよいのだろうか。

《日本文化としてのマーチング》

ソロ、デュエット、アンサンブル、合唱、吹奏楽、オペラ、ミュージカル、オーケストラ等々、伝統のある表現方法に対し、マーチングは、比較的新しい音楽表現の形態である。一般的には管楽器や打楽器を演奏しながら動くことを意味するが、もっと広義にはヴァイオリンを演奏しながら、または楽器を持たずに歌いながらフォーメーションを作ればマーチングではないか？

アメリカのようにフットボールが盛んではない、またスタジアムでマーチングする機会も少ない。ビューグルコーも金管バンドも少ない。このような日本の現状で、アメリカを追いかけても先は見えて来ないのではないか？環境も文化も異なるアメリカのレベルに追いつくことを目標とせず、半世紀経過した今、日本の実状に合致したマーチングの在り方を考えても良いのではないだろうか。

現在名古屋芸術大学では、管弦打楽器の新入生を対象に、授業において毎年ステージマーチングの研究を進めており、2月に開催される定期演奏会で披露している。今年度は、管楽器を使用せず、フォーメーションと手を使ったパフォーマンスだけでドリルを構成、打楽器六重奏に合わせて動くという新しい取り組みを行っている。マーチングというものに触れたことのない者がほとんどであるが、大変生き生きと取り組んでいる背景には、楽器を持っていないので疲れが少ないという単純な理由から、軽快に動き回れることの楽しさ、決まり事の少なさが考えられる。取り組む前は、もっと煩わしいと思っていたマーチングが、以外と手軽に出来ている。そんな自分を楽しめているのではないかと思われる。

《教育としてのマーチング》

指導者が、マーチングを教えるのではなく、マーチングで何を教えるかを明確に持っていることが必要であろう。周りを見て、聞いて、集団の中に置かれた自分の立場を把握しないとマーチングは出来ない。また間違えた時には、周りに迷惑がかからないよう、瞬時に適切なりカバーをしなければならないという、正に社会の縮図である。

青少年を育成する場として、これほど社会性を養う

材料の豊富な種目は珍しいのではないか。指導者が目的意識を持ってさえいれば、大変有意義な教育の場となることは間違いない。もちろん大会において好成績を残すことも大切な教育の一貫であろう。全力を尽くして闘ったからこそ、大きな喜び、悔しさ、感動を学ぶことができる。しかし、大会での結果はあくまでも目標であり、目的ではない。血の滲むような努力の末に得た勝利は、確かに貴重である。しかしそれは、敗北より優秀な教育者にはならない。私の経験上、両手を上げて喜んだ時より、うな垂れて涙した時の方が学ぶことは多かったような気がする。特に若い世代においては、結果以上にプロセスの大切さを踏まえた教育が必要ではないか。それならば、一人で3人分吹く必要もなく、ハイテンションスネアである必要もなく、基礎を築かずに難しい楽曲に取り組む必要もない。

アメリカのマーチングは、目的を持ってスタートした。日本においても指導者がマーチングの持つ教育的意義を理解し、日本独自の指向性と信念を持って取り組む時期が来ているのではないか。目先の結果のみに一喜一憂することなく、人間力を養う場として、またあらゆる教育の手段として日本のマーチングを位置づけ、若者の未来に新たな影響を与えていきたい。